

## 江戸の和莊兵衛、荒木先生

金 学淳（筑波大学博士課程）

江戸時代の『和莊兵衛』（遊谷子、1774）は、和莊兵衛という者が不死国、自在国、矯飾国、好古国、自暴国、大人国を遍歴する物語である。和莊兵衛が不可思議な国々を旅行し、最後には彼がその国の風習や制度などについて批判を加え、話を教訓的に終結させるのが特徴である。西洋の大航海時代の探検家が未知の世界を冒険すると同様、江戸では和莊兵衛が想像の文学の中で、不可思議な国々を旅行したのである。

時代が変わり、筑波大学にも和莊兵衛のような好奇心旺盛な冒険家があらわれた。それは荒木先生である。和莊兵衛が鶴に乗ってよその世界に移動することに対して、先生はハンチング帽子とジーンズを着てから冒険を始める。その冒険先は先生のご専門である英米文学のみならず、芥川龍之介の作品、他の国の文学や文化、食べ物など、多様な領域に広がる。

先生をご存知の方はよく知っていると思うが、先生はかなりの美食家である。今まで先生と一緒に食べたそば、泥鰻、藤壺など、様々な食べ物が思い出される。その食べ物を食べることで終わるのではなく、和莊兵衛が教訓的に説明したのと同じく、先生は食べ物を通して日本の文化を教えてくれる。特に江戸文学を専門としている私にとって、泥鰻と江戸の下町文化に関する説明は本当に良い勉強になった。

また、先生との研究会である毎週、月曜日の読書会では、発表者が自分の専門の作品を読み、先生から細かい単語の意味と由来などについて教えて頂いた。留学生である自分には、大変良い勉強や刺激になり、先生の豊富な知識や見識に感動した。しかしそれだけではなく、先生は必ず留学生にその単語の意味するものが、それぞれの国にも存在しているかどうかを聞く。それで留学生が説明すると、先生はかなり感銘しながらその話を聞く。これは先生の好奇心によるものであり、遠慮しすぎて黙っている留学生にも、話せる機会を与えようとする先生の魔術である。

先生は筑波大学を退職なさったが、これで先生の冒険が終わるわけではない。先生は和莊兵衛と同じく、また好奇心という鶴に乗ってよその学問の世界に移動すると思う。もしかしたら荒木先生はガリバーの化身かもしれない。

荒木先生、今まで本当にありがとうございました。先生から貴重な知識と勉強を教えてくださいましたが、それだけではありません。先生の情熱的な好奇心、それは何よりも自分にとって大事な財産になりました。私も先生を模範にして学問という世界を情熱的に冒険したいと思っています。先生の冒険談は私の世代を超え、次の世代にまで続いていくと確信します。これからも先生の好奇心旺盛な冒険の旅の武運を心からお祈り申し上げます。